

● 鹿 4 鹿の角の話 ●=====>猪・鹿・狸より

自分の家に鹿の角の附根を輪切りにして、それに笹に鯛かなんぞを彫刻した印籠の根附があった。忘れたような時分に、家の何処かしらに転がっていたものである。何でも祖父が若い頃にやったことだと言うた。仕事からふいと帰って来たと思ったのに、何処にも姿が見えなんだ。方々探すと、土間の向座敷を締め切って、その中でこつこつ何かやっていたそうである。何でも二日か三日、ろくに飯も喰わないで、えらい骨を折ったと言うた。今一つ、これは何でもない、ただの三又の角があった。いつからあったとなしに背戸の庇に吊るしてあった。時折笹が引っ掛けてあったりしたが、吊った紐が切れてからは、押入れの隅などに放ってあるのを時折見かけた。家の誰やらが、山から拾って来たのだと言うた。自分の家には、その他に鹿の角のあったことを記憶せぬが、隣家に行くと、カマヤ（納屋）の軒には、五つ六つも吊るして、それに蓑が掛けてあった。

以前は何処の家でも、軒に鹿の角を吊るして、蓑掛けにしてあった。そうかと思うと土間の厩の脇の小暗い処に吊るして、作りたての藁草履が引っ掛けてあるのもあった。大黒柱の真っ黒に煤けたのに吊るして、枝の一つ一つに、種袋が結びつけたのもあった。同じようなのを両方に下げて、土間の掛け竿の吊りにして、手拭や足袋を引っ掛けたのもあった。

こうした角は、いつから吊るしてあったか、忘れてしまった程だった。家が以前狩人だったために持っていたり、狩人から手に入れたものもあった。あるいはまた、山仕事に行つて、拾って来たものもあったのである。

ある女は、正月にモヤ（薪）を刈に行つて、そこで拾ったことがあると言うた。最初薪木の枝にひっかかっているのを見つけた時は、びっくりしたそうである。その日に限つて、体中が溶けるように懶かったなどと言うた。またある男は、夏の頃、山へフシ（五倍子）の実を採りに入つて拾つたと言うた。山の峯へ出て、一休みして、煙草に火をつけると、足元に、今しがた誰かが置いてでも行ったように、三又の角が落ちていたそうである。

某の男は、秋、カワ茸を採りに行つて、寒い日陰山の雑木の下で、落葉を引っ掻き廻すうち、何年か雨に



キブシの花と実

果実を五倍子（ごばいし；フシ）の代用として黒色の染料にした。



晒されて、骨のようになった二又角を拾ったことがあると言うた。

こうして拾って来た角は、何本でも軒に吊るして蓑掛けにしたのである。一度吊るせば、吊縄の腐らぬ限り、幾年経ってもそこに下がっていた。雨の日など、ぐっしょり濡れた蓑を、その枝に掛けて入口の敷居を跨いだのである。

それらの角が、今はもう何処の家にもなかった。角買い男に売ったのもあった。春秋の大掃除に外したまま、子供が玩具にするうち、いつか見えなくなったのもあった。まだ角に枝の咲かない、若鹿の角の一方に縄を通して籐織りの仕上げに使ったものなどは、つい昨日まで土間の壁に下げてあったように思ったが、それももう見えなかった。

時たま、鹿の角が座敷に吊るしてあれば、熱さましになると言うて、一方の端をひどく削ってしまったようなものだった。こんなものでない限り、もうなくなってしまったのである。鹿が亡びると一緒に、その角もまた、たちまち消えてしまったのである。